

## 15 ボランティアを通じて学生の生きる力

### (社会性・自己肯定感)を育てる

#### ○開催目的

子どもと大人の間での存在、大学生。何かを変えようとボランティアに挑戦し、活動を通じて大きく成長していく学生もいる一方で、自己肯定感が低かったり、コミュニケーションが不得手だったり、まだまだ成長過程の学生も多くいます。どうすれば地域に貢献しながら、学生の“生きる力”を育むことができるのか。事例や話し合いの中から、育ちを応援するためにできること、大切にしたいことを見出し、プロジェクトにつなげていくことを目的とします。

#### ○開催日時

2月13日(土) 14:30 ~ 17:00

#### ○参加者数・出演者・団体

参加者数：25名(参加者20名、出演者2名、スタッフ3名)

コーディネーター：

村上 徹也さん(日本福祉大学サービスラーニングセンター 副センター長)

事例発表：聖学院大学ボランティア活動支援センター

#### ○プログラム内容

##### 1 趣旨説明

コーディネーターの村上さんより、問題意識の共有としての事前レクチャーをいただきました。

##### ○レクチャー内容

ボランティア活動を通じて学生たちは「コミュニケーション力」、「意見を持ち自ら動く力」、「思いやりを持ち接する力」、「計画し実践する力」を身に付けていき、それが結果として、自身の成長につながる。しかし、自分の考えを言葉で伝えられなかったり、不安ばかりで積極的になれなかったり、相手の立場に立てずもめてしまったり、誰もが簡単に活動になじめるわけでもない。

そのような学生たちの人格を否定することなく、学生自身が、また大学ボランティアセンター、受け入れ先や活動に関わる全ての人たちがハッピーな関係で学生の活動や育ちを応援し、受け入れていくためにできることを考えたい。

##### 2 グループ分け、自己紹介

大学関係者と学生ボランティアのマッチング・受け入れ等を行っている地域からの参加者が混ざった、立場の違う5人のグループをつくり、各自付箋紙を一枚手にとって、学生がボランティア活動をする際の学生の人柄に関わる課題の中で、一番悩ましいと思う事項について一つ記入し、順番に、名前と所属、付箋紙に書いた内容を紹介

し合いました。

### 3 事例報告

学生の個性を生かしたプロジェクトと題して、聖学院大学ボランティア活動支援センターより事例報告を行いました。積極的になれなかった学生たちが、戦隊、着ぐるみボランティアとして堂々と人前に立って活動するようになったプロセスや、地域のニーズに応じていくだけではなく、活動発表等で自ら発信していく場を保证するなど、コーディネーションの工夫について紹介をしました。

○村上さんによる「事例紹介に見る話し合いのヒント」

- ・(人前に立つのが苦手という) 弱みを強みにする
- ・ニーズのある側との対話を大切にする
- ・(グループで活動する、受け入れ先と学生が面識あるなど) 学生を孤立させない工夫
- ・学生の成長の成果を受け入れ先にフィードバックすることが、受け入れ先の自信につながる
- ・(この活動を行うことでどのような効果があるのか) 見通しを与える

### 4 学生の個性を活かすプログラムの検討

課題のある一人一人をどう支えていくのかという視点で、学生の個性を活かし、学生の弱みを強みに変える対応策とそこから生まれそうなプロジェクトについて考え合って、模造紙にまとめました。グループからは下記のような意見が出されました。



○対応

- ・フィードバックをしっかりと行うこと
- ・役割を作ること、気づきの場とすること

○プロジェクト

- ・研修会やボランティア講座を実施する
- ・交流でき、出会いがある場を作る

### 5 全体シェアリング、まとめ

○村上さんのまとめ「ボランティア活動がみんなにとって幸せなものであるために、学生との関わりで私たちができること、大切にしたいこと」

**入口**

- ・興味、関心をつかむ多様なきっかけづくり。
- ・気軽に楽しく単発でも、良い体験の機会をたくさんの人に提供する。  
(裾野を広げた先に、継続的に活動する学生が出てくる)

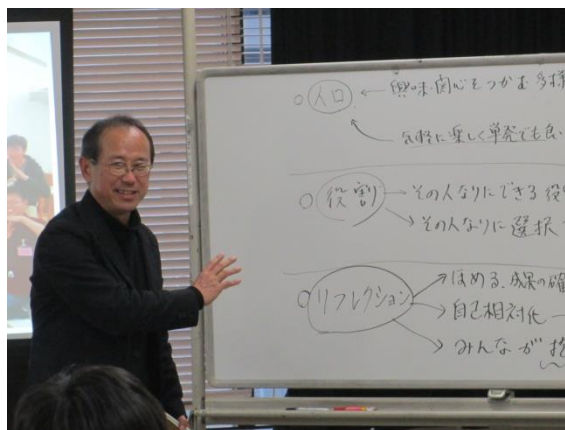
**役割**

- ・その人の個性に合わせてその人なりにできる役割をつくる。

- ・活動するか否か、保留にするか、その人なりの選択を保証する。

### リフレクション（ふりかえり）

- ・ほめること（あなたがいたからこれができた！）、成果を確認することが、やりがいや自己肯定につながる。
- ・一人でふりかえるのではなく、いろんな人と意見交換をすることで自己相対化ができる。これがコミュニケーション力、相手の立場を理解する力を身につける原点となる。
- ・みんなであらゆることについて、みんなが包摂的な関係になれる。



## ○成果と課題

参加者一人ひとりの学生との関わり度合いが異なることもあり、「学生がボランティア活動をするときの学生の人柄に関わる課題」を出してから最後のプロジェクトの検討を行うプロセスで、それぞれ学生をどう見ていて、どう思っているかという話が白熱し、それぞれの視点への理解は深まりました。

しかし、学生との距離感が参加者によって異なり、学生の捉え方を同じ目線で共有することが難しかったため、具体的なプロジェクトを見いだせるグループは少なかったです。一方、さまざまな立場の人が学生について思っていること、感じていることを丁寧に語り合えたのは意義があり、その話し合いの先に、学生をどう活動に受け入れていくか、どんなプロジェクトの可能性があるか、といった具体的な話が出てくることを考えると、今回は前段で欠かせない共有ができたと考えています。

## ○参加者の声

- ・「生きる力」の考え方はさまざまだと思いました。アイデアを形にすることや企画力を、ボランティア活動を通じて成長させたい人が多いと思っていましたが、より基礎的な力を身に付けたいと思っている学生もいると知りました。
- ・普段言語化しないことを話して自分の中で整理することができました。
- ・学生の味方になることは大事だと思いました。自信のない学生たちがいる中で、同じ目線で協力できたら良いと思いました。
- ・情報交換の中で、今後のやるべきことが見えたような気がします。
- ・外部者なので、当事者の考えがわからず、想像しながら参加しました。

## ○担当者・記録

《担当》

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

遠藤 信裕（なぎさ和楽苑）

辻 陽一郎（國學院大学ボランティアステーション）

柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）

《記録》

芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）